

第三期武蔵野市コミュニティ評価委員会 第2回議事録

日 時 平成22年11月29日（月） 午後2時～4時
場 所 武蔵野市役所 413会議室
出席者 朝岡委員、江上委員、島森委員、平委員、井波委員、増田委員、
大杉委員（名簿順、敬称略）
事務局（市民協働推進課：森安、江波戸、大橋、志賀）
欠席者 なし
傍聴者 なし

< 次第 >

- 1 開会
- 2 議事
 - (1) 評価の方法について
 - (2) 意見交換
- 3 その他
- 4 閉会

< 配布資料 >

資料1 第三期武蔵野市コミュニティ評価委員会評価の方法案

< 参考資料 >

- 参考資料1 コミュニティセンター利用実績（平成21～17年度）
参考資料2 コミュニティセンター利用状況（館別・部屋別）

< 議事録 >

1 開会

【事務局】 会場のご案内が徹底をしておりませんで、申しわけございません。かたらいの道市民スペースがいつも使えればよろしいんですけども、そうでない場合には市役所の中の会議室を使わせていただきますので、よろしく願いいたします。

それでは、第2回の第三期武蔵野市コミュニティ評価委員会をたがいまより開会をさせていただきますと思います。

最初に資料の確認ですが、お手元の一番上に次第があるかと思えます。その次が席次表、それから日程調整表ですが、上から2行目に「第2回委員会12月8日までにファクス、メールにて事務局まで」というのは誤りでございまして、12月8日までにファクス、メールで事務局までご案内いただければありがたいですけれども、もし今日お帰りまでの間に事務局にご提出をいただければ、さらにありがたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。一番下の右側、2月11日ですが、祝日になっておりますので、わざわざ休みの日にすることもなかろうと思えますから、こちらはバツテンにさせていただけるとありがたいです。あと資料といたしまして、「第三期コミュニティ評価委員会 評価の方法案」というのが1枚、それから参考資料として、「21年度コミュニティセンター利用実績」というふうに書いてありますけれども、コミセンの利用実績が年度ごとに、そして館ごとに整理をしたもの、それから参考資料の2が「利用状況（館別、過去5年間）」というふうになっておりますけれども、これはそれぞれの館ごとに経年比較が見られるような格好になっておりますので、こちらも参考資料として、どういふふうにコミセンが使われているのか、どういふ利用実態なのかということのご確認をいただければと思えますので、よろしく願いいたします。

2 議事

(1) 評価の方法について

【委員長】 どうも皆さん、ありがとうございます。議事に入りたいと思えますが、今日の目標は事務局案もありますし、それから皆さんに少し宿題で考えてきてくださいというふうに申しあげましたので、どういふふうに評価していくかということです。そのあらましを決めるというのが今日の目標ということになるかと思えます。

それで、皆さんそれぞれお考えくださっているかと思うのですが、最初に事務局の案を聞いて、それをたたき台にしつつ、皆さんの意見も入れながら成案を得るといふような進め方でいきたいと思うのですが、いかがでしょう

か。

(「異議なし」の声あり)

【委員長】 よろしいでしょうか。まず事務局から、資料1に基づいて少しご説明をいただければと思います。

【事務局】 では資料1、2枚つづりになっていますが、ごらんください。あくまでも事務局としてのたたき台でございますので、これを参考にご検討いただければと思います。最初の段落ですが、前回もご説明をいたしました。武蔵野市では昭和46年の第一期基本構想・長期計画以来、コミュニティセンターを地域ごとに整備してまいりました。その設置の目的は多世代、いろいろな世代の方が集う地域の居場所として、あるいは地域における市民活動の拠点として、順次、現在では16のコミュニティ協議会によって、正確には19のコミュニティセンターが運営をされています。この運営については、コミュニティ協議会による自主活動として自主的な運営がされているということ、自主三原則についても前回申し上げました。

一方で平成17年4月から、指定管理者制度というものが導入されました。法的には平成15年に法律が制定をされましたが、平成17年4月からコミュニティセンターの管理運営に関しては、指定管理者によって管理をしていただくことになりました。資料にあえてこういうふうに書いていますのは、指定管理者制度が導入されて以降、コミュニティ協議会では事務が煩雑になった、言葉の定義が難しいとかいうことで、どちらかといえばマイナスの受けとめ方をされているのかなというふうにも思っていますが、決してそういうことではなくて、指定管理者制度は、市長が従来持っていたコミュニティセンターの貸し出しなどの権限についてコミュニティ協議会にゆだねるということですので、そういう意味では先ほど申し上げた自主三原則を法的に担保するものというか、自分たちが自主的にやっていく、いろいろな活動をしていく、それを法的にも担保してやっていく、自主的な自己決定権が広がっていく、自主三原則とも全く矛盾をしない制度だということをご理解いただきたいということもありまして、あえて資料で文章化をしております。

それで、コミセンはさまざまな活動を行っているんですけども、協議会の活動については実質的な活動としてやっていただいておりますので、その部分についてどうこうというのはなかなか難しいのかなというふうに思っております。評価委員会としての評価の対象というのは、コミュニティセンターの運営上の最低限のものについて評価をしていくのがいいのではないかなというふうに考えております。

評価の目的ですが、前回もコミセンの利用状況についてご説明いたしました。今日も資料としてお配りをしておりますけれども、やはり一部の方にし

か使われていない、あるいは市民の方がコミュニティセンターというものについて十分ご理解をいただいている、あるいは市民によって組織をされたコミュニティ協議会がコミュニティセンターを運営しているということについても十分な周知がされていないという現状もございますので、市民の皆さんにコミュニティセンターがコミュニティ協議会によって運営をされているということ、その運営の内容についても広く公開をしていきたい、そして、それによって市民の方々にさらにコミュニティセンターを使っただいて、コミュニティづくりが進められていくというふうなものにしていきたい、市民への公開のためのツールとしてやっていきたいということと、同時に公金を使って運営をされていますので、その部分についても透明性、客観性、公平性等が伝えられ、説明もできるようなものとしてまいりたいというふうに考えております。

2枚目の評価の構成ですが、今、コミュニティ協議会に、前回お配りをいたしました自己点検評価表を実施していただいております。平成23年1月6日にコミュニティ研究連絡会の定例会がございまして、そこで集約をすることになっています。協議会の皆さんみずからで自己点検評価、内部評価をしていただくのですが、その内部評価と、それからコミュニティセンターを利用なさっている方々、コミュニティ協議会ではない外からの評価というもの、そして自己点検評価に関しては、それを題材にしながら私ども事務局が協議会の皆さんとお話し合いをしながら、ヒアリング形式でどういった対応をしているのかとかということ、自己点検評価表に書かれたことについてさらに掘り下げるようなヒアリングができればいいのかなというふうに思っております。その3つの材料を使って、それをもとにして評価委員会で評価を行っていただくという段取りで進めていけばいかがかなということでございます。

評価の視点・判断基準ですけれども、まず運営が工夫をされているか、利用者の方、市民の方から満足を得られているかどうかということで、これは大事なことだと思いますけれども、しっかりと情報が市民の方、利用者の方に提供されて公開をされているか、あるいはいろいろな世代の方々に使っただいて居場所となり、交流を深めていただきたいわけですので、特定の方々の利用だけではなくて、新しい方々が利用いただいているかどうかということ、それから利用されている方から出された意見なり要望なりについて、きちんとそれを反映して運営がされているか、地域の住民や地域の団体、さまざまな活動をされている団体があるわけですが、そういった方々と連携・交流がなされているか、利用者の方への配慮と適切な対応、これは窓口対応ということが大きくなっていくのかと思いますけれども、そういった

ことがきちんとされているか。利用方法等についても、固定的な考え方に基づいてされているのではなくて工夫がなされているか。内部の連携というのは、窓口担当者同士でしっかりと連携をとって、同一の対応ができるようになってきているか。あるいは、協議会内部でしっかりと議論がされていて、そのことが保障されているのかどうなのか。

それから適正な運営ということについては、ちゃんと決まりに沿った公平な運営がされているのか。個人の情報を取り扱う場所になりますので、それがしっかり保護されているか。年間の計画を立てて運営を行っていただいておりますけれども、そのとおりにされているのか。経費の削減というのは、そもそもそれほど大きな金額ではないですけれども、無駄がないようにしていただいているのかということと、しっかり適正にそのお金が執行されているのかということ。

施設・設備の管理ですけれども、これはめったにないことなんですが、何か異常があったときに施設の設置者である私どものほうにしっかりと連絡をいただいているか、あるいは可能な部分については自分たちのほうで対応していただいているのかどうなのか、備品も幾つか購入をいただいて配置がされているわけですけれども、それがしっかり管理をされているか、防火管理、防災訓練等、利用者の方々の安全確保のための対応ができてきているのか、これらの項目については先ほど申しあげました自己点検評価表の中に項目として挙げてあるのですけれども、これらの点が判断・評価をしていく上での1つの基準になっていくのかなというふうに考えております。

【委員長】 どうもありがとうございました。具体的にどういうふうに進めていくかということはまだ後段のお話になるかと思っておりますけれども、その評価の骨組みみたいなことを今、1つの案をお示しいただいたわけですが、私なりにこう理解したということをお知らせすると、多分評価というのはいろいろな方法があるんだと思うんです。例えば、学校で子供たちに成績をつけるというのも1つの評価で、教科ごとに到達目標みたいな、ここまでやろうねという目標みたいなものがあって、どこまでいっているかということをおテストとか、その他いろいろな方法を使って評価していく。それは結果として1～5とか、何点みたいな形で評価されていくという評価の仕方があると思うんです。

多分今、社会でわりと多く、会社とか我々の大学とか、いろいろなところ、行政もそうです。いろいろな評価制度というのはあるけれども、今学校を例に申しあげましたけれども、そういうわりと厳格な評価というのが一般的に行われているんだろうというふうに思います。しかし、武蔵野市のコミュニティ活動を評価していくというときに、そういう厳格な評価みたいなものが

果たしてできるだろうかというのと、これはなかなか難しい。そこで、多分2つの点に絞られているんだと思うんです。

1つは、そういう厳しい評価、厳格な評価というのは難しいかもしれないけれども、やはり、税金を投じて住民が自主的にではあるが、公益的な活動をしているのだから、その公益性の部分はやっぱりきちんと評価をしなければいけないだろう。それは、評価の目的のところの前半になりますか。指定管理者としてきちんとやってくさっているかどうかを見ておこう、というのが1つあるんだらうと思います。

それともう一つ多分あって、今の公益性ということをもとにしながら、結局その各協議会がこれまでの評価委員会や、あるいは協議会の方々が少し手を加えた自己評価で、その厳格な評価というのは多分自己評価だけでは済まないんだと思うんです。けれども、まずは自主的な活動というのを自主的に評価するというような方法を使って、内部評価ができないだろうかということです。そのときに、多分内部評価だけだと、ある種自分たちでやっていることを自分たちで評価するというのは、それだけでは見えない部分も多分出てくるだろうということで、外の人たちがどう見ているかという外部評価の視点もやっぱり入れたほうがいいんだらう。それらをどういうふうにするかというのは、今後考えていかなければいけないところですが、外からどう見られているかということを見ていこうというのが外部評価です。

それと、今の案だと主管課、つまり市民協働推進課が行政の立場から内部評価、ないしは外部評価の結果に基づいて、少し突っ込んで質的な話を伺ってみようということです。それは主管課がやるのか、我々がやるのか、一般市民がやるのがいいのか、これはまたいろいろ議論があるところだと思います。コミセンという住民の共有財産みたいなものを、税金を使って運営しているという形からいえば、行政の方々にヒアリングをしていただくというのは1つの考え方だらうと思います。

大きく分けて2つ、後半の活動の部分というのは内部、外部、それからそれを補強する形でのヒアリングというような形でやっていったらどうかというのが事務局案かというふうに思います。

ですから、これまでのやり方とそう大きく変わるわけではない。ただ、その主管課によるヒアリングというような形でやることによって、多分いろいろな要望みたいなものも出てくるだろうし、あるいは要望というか、ニーズといったほうがいいかもしれないものが、いろいろ聞き取れるかもしれない。それは直接評価ではないかもしれないけれども、市役所とコミセンとがいろいろ協働していくということが今課題になっているわけで、そういう協働に向けての第一歩みたいなことに、結果としてなるのかもしれない。

私なりに受け取ると、多分今申し上げたような形でやっていこうという案かなというふうに思います。それはそれで一応案として受け取って、それでいいかどうか、もうちょっといろいろ工夫ができるかもしれないし、あるいは違った形の評価というのものもあるかもしれない。その辺皆さんのご意見をいただきながら、今回の評価をどういうふうにしていくかという議論を進めていければというふうに思うのですが。まずはこの事務局案プラスご自分の考えてきていただいたことを何かプラスしてご意見をいただければと思うんですが、端からというのもなんなので、どなたか口火を切っていただければと思うのですが。あるいは事務局への質問みたいなこともあるかもしれませんので、その辺はもうご自由に。

(2) 意見交換

【E委員】 事務局のほうで、資料1の評価の構成というところ、2枚目です。これに沿って今ちょっと考えていたんですけども、協議会による内部評価というものについては、この間も最後に感想的なものというか、意見を言わせていただきましたが、内部でやる評価はもちろん必要だとは思いますが、それはやはり設問の仕方というか、質問の仕方が協議会にとってその項目をやったことによって、次に生かせるような設問がいい。やはりそれをいつも、例えば何年、今までも評価表に沿って評価を自分たちでもやってきましたけれども、なかなかそれを次に生かしているか、今のところどうも、コミセンによって違うかもしれませんが、それを次のところに生かそうというか、生かしてないほうがいけないのかもしれませんが、役に立てるようなものに少しでもなるといいというのは。自分たちがそれをやることによって、何かさらに元気になるとか、先ほど委員長が言った何か到達目標的なものが持てるという。質問の仕方が、全体的にそういう言い方をするのか。去年までというか、今年もそうですけれども、質問の中に、例えば「何々によって十分と思われるか」とかいう、結構十分という言葉も使われているんですが、その十分というとり方が非常にわかりづらい。十分というのはどういうふうにとるかによって、ちょっと違ってくる。わかりづらいということもないかもしれませんが、でも、とり方によって十分という言葉は変わるものもあるので、その辺はどうなのかなというのものもあるんです。何かほかの聞き方があるかどうか。

それと、2番の利用者による外部評価。これはもちろん必要なことで、やはり協議会にかかわっている者というのは、皆さんいいと思って一生懸命いろいろなことを考えてやっていますが、やはり利用者の方とか、その地域の人にとって、ほんとうにあれが合っているのかどうか、答えられているのか

どうかというのは、やはり知る必要がある。それも時代とか、ほんとうに時によって変わっていくかもしれないので、これも前とは変わっているかもしれない。年々変わるものもあるでしょうし、人口の構成とか、いろいろなものもあるので、そういうものは必要。その方法はいろいろあるのか、考える必要がある。アンケートも前にやって、やはり結構役立つというのはありますね。でも、アンケート以外にも何か方法があるのかもしれないです。

利用者による、そういうアンケートなり何かで出てきたご意見というものと、協議会による評価のものと、どう合致させるのかというか、その辺は考えなければいけないかなと思っています。

あとは、先ほど言った3番のヒアリングというのはとてもいいことだと思って、ヒアリングの方法は行政側がというか、主体的にやってくださるか、全員が一緒になってやるのか、ちょっとその辺はまだ考えはまとまっていません。ただ、ヒアリングはいいことだと思っているので、やってみたいかなと思っています。

【委員長】 ありがとうございます。自己点検評価表を使った内部評価の手続的なことですが、これはどうしますか。つまり評価委員会が立ち上がる前に、既にもう配られてしまっているわけで。

【B委員】 私はこれ、中身をもうちょっと、せっかく公なものであれば、見直すべきところが幾つもあるのではないかなというふうに思いました。でも、もう配られているということなので。

【委員長】 例年のスケジュールで、自己点検評価表は動いているんですよ。

【B委員】 とにかく自己点検評価表は必要だと思います。まずそこしかない、それがスタートですから。私の場合は、結論から言うと、今までの自己評価表をずっと見させてもらったんです。ほとんど普通以上ですよ、4とか5とかね。不十分とかいうのはほんのわずかです。ということは、むしろ本来不十分なところをどう見ていくかとか、そういうところに絞ってもいいのではないかな。多分毎年、2年目ですかね。去年ないんでしょう、毎年やっていますか。

【E委員】 この新しいスタイルになってからは2年目。

【B委員】 いただいたのを見ても、ほとんど変わっていません。だから、特に4とか5とかいうのは、地域のネットワーク。ここがやっぱりちょっと悪いとかいうのはあります。でも、それ以外はかなり好成績です。毎年これをやる意味はあるのかなと。むしろもうちょっと絞って、逆に言ったら、例えば前回不十分、あるいはやや不十分であったものに対して、現在どうなっているかと。それから、何かそういうこととかをもうちょっと。個人的には

この評価表ではかなり不満というか。例えばどちらとも言えないというのは、これはちょっと、普通なら普通でもいいと思うんですけども、どちらとも言えないというのも、やっていてどうなのかなと。かなり言葉足らずじゃないかなというので。

【委員長】　そこは多分論点が2つあって、その内容というか、質問の項目ですよ。もちろん表現の仕方みたいなものも含めて。それから、それを協議会の中でどうやって何番に丸をつけているかという部分と。

論点が2つあるんです、多分。いずれにせよ、進んでしまっているものを一度ストップするか。そうすると協議会のほうは二度手間になるので、嫌だなと多分言うと思うけれども、でもそこをあえてということもあり得るかもしれないですけど。そこをどうするかというのはちょっと、考えなければいけない。

【B委員】　それであれば、要するに、過去、前回の十分ではなかったところだけでも、逆に、要は普通以上だったらざっくばらんでいいのではないということになる。それをまた改めてやると。だからかなり、これをやることに非常に手間だという意見がありますよね。コミュニティ協議会としてこれをやること自体に。それはかなり理解されてきたというんですけども、例えば個人的に毎年やられたら多分同じようなことになってしまうのではないかなと。だからちょっとその設問というか、これはこれでいいんですけども、そこをどうするかのほうがむしろ問題ではないかなとは思いました。見事に同じです、毎年もらうやつ。どこのコミセンのやつ見ても。

【C委員】　設問のところに、「十分なものだと思いますか」というのがすごく多くて、それでその「十分なものだと思いますか」といって、「普通」といっているということは、十分なものだと思っているということなんですか。何かちょっと。むしろこの設問よりも、何か自由記述のところが毎年変わっていて、重要なのかなというふうな感じがします。だからこの自由記述を引き出すための、この前はちょっと形式的にあるのかなみたいな。

何かこの中で丸をつけた部分とかが、委員長がおっしゃったように、ちょっと不十分なところに何か丸がしてあったりとかいうのを突っ込んで聞くのも、このヒアリング。だから結局内部評価はやっぱり大事ですけども、そのヒアリングを聞いたことによって、ちょっと評価をしていくとか、そういう形になるんでしょうか。

【委員長】　あとは経年的な変化。ほんとうにすべての項目が毎年ずっと同じというところもあるかもしれないし、少しでこぼこが、いい評価をした年と悪い評価をした年とかはあるかもしれない。一覧表みたいなものをつくってもらえますか。これを横に並べて見比べればいいんですけども。

【C委員】 その移り変わりみたいなことを。

【事務局】 できなくはないですよ。ただ、途中から5、4、3、2、1がA、B、C、D、Eか何かに変わっているので、それを対比するようになればできなくはないと思います。設問だけのせて、比較していけばいいわけですよ。第二期の評価委員会の報告書に一覧が載っていましたがけれども、そんな格好でということであれば。

【委員長】 そうですね。ちょっと見てみたい気がする。

あと自由記述は確かに大切ですよ。どういうふうに、どういう思いでこれ書いているのかというあたりはちゃんと酌み取らなきゃいけないところでしょう。

今、その自己点検評価表に話題が集中していますが、それを含めて、あるいはそれ以外でも、どうぞお気づきのこと等々。

【D委員】 私は基本的に事務局案の、この3段階の評価でよろしいかなと思っています。自己点検表を斜めにしか見ていないんですが、自己評価チェック、A～Eのところはほとんど高評価をしているなという感じはしました。ただこれを外部評価ですね。利用者評価と突き合わせることによって、そこでできた、何か乖離しているところについてまたヒアリングで拾っていったら、埋めていけばいいのかなというようなことを思います。

やはり見ていてどこもそんなに変わらなかった中で、5番の目標と成果というところが結構それぞれの特徴が出ていて、どういう思いを持って活動しているのかなというところがあらわれておもしろいなと思ったんですけども、境南はわりと今話題になっているコミュニティの課題です。利用者が固定化しているとか、コミセンの参加者が固定しているだとか、窓口の担当者がコミセンの方針自体を把握していないのではないかみたいな、そういう問題意識を持って活動方針を立てているということを書かれているので、これは歴年の評価をしている成果というのがこういうふうに生かされているのかなという感じがしました。

それと、もう一つ外部評価ですけども、これは利用されている方に対するアンケートを今までしているかと思うんですが、実はこういう利用されていない方の評価というのも一番というか、大きなものがあって、何で利用していないのかとか、ほんとうに外から見てわからない、中で何をやっているのかというような評価を把握する方法が何らかあるのかというところをどうやっていくべきかなと。利用している方だけではなくて、利用していない方、利用しづらい方、そういった方の意見は何か、ここに何らかの形が把握できればいいのかなというような感想を持ちました。

【B委員】 今回の最後のお話は、第六期コミュニティ市民委員会のときに

行政のほうからアンケートをとっていただいているんです。利用者だけではなくて、利用されていない人たちからも一応回答はもらっているのです。

【委員長】 そんなに古いデータではないので使えますよね。

【B委員】 去年ぐらいだったか。そこはかなり。

【副委員長】 前回ちょっとお聞きしたかもしれないんですが、今コミュニティ協議会が指定管理者として管理をしているわけですけども、指定管理者の場合は事業計画を出していますよね。その契約期間と計画書というのはあるはずですよ。その場合に、契約期間終了時までにはどういう目標を立ててやっているかというのがあがるはずですよ。それは今回出てきてないんですが、あることはあるんですね。

【事務局】 基本協定というのが、5年間を通しての協定がございまして、プラス年度協定というのを年度ごとに結んでいます。

【副委員長】 5年間の基本協定ですね。そこにはどういうものが書かれているんですか。

【事務局】 一般的なことになってしまっています。

【副委員長】 つまり、質問したのは、評価がこういうふうパターン化する理由は、例えば5年間であれば5年間でこういう目標を実現する、こういう成果を上げるというふうには計画を立てて、その計画を1年1年積み上げていって、最終的には5年後にこれだけの成果を上げますという。そういう計画と照らし合わせて評価をすると、実はパターン化しないはずですよ。だから、先ほど委員長がおっしゃったように、この自己点検評価表の経年変化を我々が見るのではなくて、ほんとうはその各協議会が、自分たちが評価するときに去年こう書いたけれども今年はこうなったと。それはわかるはずですよ。ずっと並べてみると、上がったたり下がったりしているようだけれども、確実に成果が上がっている部分と停滞している部分とあって、それが最終的には、理論上はすべてAに5年後にしなければいけないはずですよ。だから、そういう計画の部分、具体的に達成すべき目標が明らかになっていないから評価がこういうふうには、ある意味ではパターン化してしまっているんじゃないか。

だからもう一度、1年1年の自己点検評価表のあり方はこれで進めるしかないけれども、1つの節目なので、過去4年分と今年入れると5年目ですよ。この5年間のそれぞれのコミュニティセンターの自己評価表を自分たちで見てもらって、その変動や課題がちゃんと解決されつつあるかどうかということ、自分たちで5年分をもう1回評価してもらおうというのがあってもいいのかなという気はします。だから1年1年は今までどおりやってもらって、今回は過去5年間のものの経年変化も視野に入れながら、つまり5年たってもやれないことはかなり大きな問題で、やれていることは多分もうやりよう

がない部分もあるわけですから、そういう意味で言うと、もう一度この内部評価については、単年度評価とは別に5年分の評価というのをやる可能性があるかどうかです。やれるのであれば、ぜひそういう視点でやっていただくのがいいのではないかというふうに思います。

そのときに、非常に一般的で具体的な指標は出てこないとはいいいながらも、やっぱり基本協定を結んでいるわけですから、その基本協定に即してちゃんとできているかどうかということを見ていただくのは必要でしょう。

【事務局】 率直に申し上げて、基本協定について協議会で日常的に意識をしていらっしゃるということはどうなのかなと。多分さほどはないのではないのかなという気はします。条例の趣旨に基づいて自主的に運営をすることとか、そういった目標なりとかいうようなことになってきますので、そのことで改善意欲がわいてくるだとかというふうなものではないかかもしれません。

【副委員長】 本来であればというか、その基本協定を結んだ後、それぞれのコミュニティ協議会が5年後の具体的なコミセンの運営の到達点みたいなものという具体的な、必ずしも数値化しなくてもいいけれども、目標を具体化して取り組めばもっとよかったんでしょう。基本協定そのものは要するに市役所との契約関係なので、あまり細かいことを書き過ぎると身動きがとれなくなってしまうので、だけどそれを踏まえて、それぞれの協議会が自分たちの地域やコミセンのあり方について具体的な目標を持つということは必要だったのかもしれないです。そういうケースはないんですか。このコミセンの中では。

【E委員】 各協議会にそういう意味では任されているというか、その目標もそれぞれが、その年によっておそらく立てているとは思いますが、そういう感じですか。だから、私はけやきコミュニティ協議会にかかわっていますけれども、この年はこういうことに力を入れていこうとか、ちょっと大きなスローガンというか、そういうものを掲げて、それに沿って、その年はそこに結構、いろいろな面でそこに入るように力を合わせていくというか、そういうことをしたりとか。各協議会によってそのやり方は違うと思います。同一のものはないです。

【副委員長】 先ほどから話題になっている5番の目標と成果は、丹念に読ませていただくと非常にこう、1年1年工夫されていることはわかるんですけども、例えば行政でも、ほかの組織でもそうですけれども、1年1年の目標と計画をやっていたのでは、実は全然課題は進まないんです。なぜ3年とか、5年とか、10年というスパンで計画を立ててやるかということ、例えばさっきから利用者が非常に限られているという問題について、1年1年目

先の目標を立てていっても改善はできなくて、3年、5年、長ければ10年ぐらいのスパンで戦略的にやっていかないと、すぐ成果は出てこないです。そういう意味でいうと、私自身は、たとえ評価表にいろいろな問題や限界がありながらも、こういう実際にコミュニティ協議会がコミセンの管理運営について、毎年パターン化しながらも自己評価していることの意味は大きいと思うんです。というのは、振り返りをやらないと、必ずマンネリ化してしまうので。評価自体がマンネリ化しているから何とも言えないんですけども、どんな組織でも1年1年反省を込めて、振り返りは必要です。だからその振り返りのきっかけにはなっていると思うので、工夫は必要だけれどもやる必要はあると。

だけど、これをいくら繰り返していっても、今ずっと挙げられたような課題が解決できる、あるいはもっともっと市民にとって身近なコミセンになるような展望が見えてこないような気がするんです。そうだとすると、より積極的に、さっき申し上げたように、せつかく5年分たまっているのであれば、5年ぐらいの長いスパンで自分たちの活動をもう一度見直してもらえよう、そういう自己評価、内部評価をやっていただいたらいいんじゃないか。項目についてはもう少し議論は必要かもしれない。スパンのとり方を1年じゃなくて、現状ではなくて、過去5年間さかのぼって自分たちが何をしてきたのかという、そういう内部評価にできたらいいんじゃないかなというふうに思うんです。

【E委員】 やはり副委員長がおっしゃったように、コミュニティ活動というのはほんとうに長い目で見ないといろいろなことが進んでこないというのはあって、第六期コミュニティ市民委員会でもかなり、いろいろな課題とか、次なる課題とかもああいう形で話し合いました。それで結局、自分のコミセンしかちょっと例をとれないんですけども、けやきコミセンの運営委員の1人としてやってきたのは、20年前に建ったときから、結構委員長にも来ていただきながら勉強を、将来のというか、どうしていったら人をつないでいかれるというのはもう20年前から常にそういう話をして、ほんとうに長い先のことを勉強するとか、コミュニティについて私たち自身が、コミュニティ協議会がもっとそういうふうに、どのコミセンもほんとうはなれるとか、やっているところもあると思いますが、その意味では、副委員長がおっしゃったような、もう少し何年か先のものまで見据えたような質問と、ちょっとやりがいがあるような、そして次の年につながって、さらに評価したときに自分たち自身でも、去年に比べてどうなっていたらどうかとか、5年たったときにもものすごく変わる、逆にそういう目標があると変わるものもあるかもしれないので、とてもそれはいいことだ

と思いました。

B委員がおっしゃったように、やはり、質問はずっと同じような質問というか、この評価表。だからある意味で私たちいつもこのことを、最初はとも理解できなかったものもあったんです。昔、この評価委員会ができたときに。理解というか、何のためにやっているというのを疑問に思いながらというか、でも評価することは自分たちを振り返ることにもなるし、必要だということとはだんだん理解ができてきて、この何年間かやってきて。でも、質問内容はここのところ変わってない。そうなると、さっきも言ったように丸をつけるところは、ほんとうにもう十分なところは十分であるというか、もう私たちは十分だと思ってやっている、そういう感じで多分つけてしまうというか、当然つけると思うんです。だから、何かその辺はあるかなと思います。

【B委員】 確かに振り返りというのは大事だし、我々も会社で働いているとき常にそれをやって、ところがそれはなかなか一過性でできないんです。そのときだけは振り返るんだけど。副委員長がおっしゃったように、私も今のそのお話で、やっぱり中期計画です。企業でも、今いろいろな、社会福祉協議会でも、ボランティアセンターでも、やっぱり3年程度の中期計画というのを立てて、その時点でまた、毎年見直すんですけれども、そういうのもかなり、今まで取り入れられたことのないものを取り入れることには意味があるのではないかなと思いますけど。それは過去5年の振り返りプラスそういうのがあれば。そういうふうに皆さん、協議会の方がそのように思っただけかかどうかというのはあるんですけども。

【委員長】 僕はよくわからないけれども、評価というのは、評価自体がもちろん目的なわけではなくて、その評価することによって振り返る。でも過去は変えられないわけだから、その過去のいろいろな経験から課題とか、ニーズとか、そういうものをまとめながら、じゃあ先、これからどうしていくという将来像というか、将来に向けての何か設計図みたいなものを書いていくというのが、多分評価ということの究極の目的だろうと思うんです。だから、今年やっている自己点検評価表、これは進んでしまっているもので、そのまま使うしかないかもしれないけれども、過去からの変化をどう読み取ってもらうかというあたりで、先に向けた目標みたいなものを見出していくというのが今回の内部評価のみそという感じになりますかね。

ただそのときに、先ほどもちょっと申し上げたんですが、資料は多分事務局でつくってもらってもいいわけけれども、それをどういうふうに読んでいくかというね。それはだれがどういうふうにと。だれがというのは、協議会の中のだれがという意味です。かなりそういう狭い意味ですけども。その辺のひな形を示すようなことをしたほうがいいかなというのを率直に思

うかな。今の毎年の自己点検評価表の記入の仕方というのもコミセンごとによりかなり違うわけで、その違いが実は振り返り方の違いにもつながっているところがあるような気がするんです。だから何か、こういうふうにやったらどうですかというようなやり方を提示するほうがいいのかもかもしれません。そこまで自主的に完全にやってもらい必要もないかなと思ったりしますけれども。ちょっと具体的な話になってしまうけれども。

【A委員】 今、副委員長のお話をお聞きしていて、私たち毎年、何年間か試してみても、やはり記入するだけで精いっぱいというところもあるんです。というのは、時期的に大変忙しい時期からいつも始まるものですから、もうほんとうに秋は大変忙しい。コミセンの用が多い時期だったり、個人的な用も多い時期だったりして、この評価表をつけることというのはもう、運営委員会の時間内でしょうと思えば大変な、日にちを変えてやればいいんですけども。

今、お話をお聞きしていて、今度は今までしたことをもう一度見直して、今後どうしていくかというそのきっかけづくりになる時期だなとも思いましたので、いい提案だなと、うちのほうでも実行したいなというふうには思いました。皆、今までつけたものをどうしようかというのは、漠然としていてわからなかったと思うんです。でもそういうふうな考え方で見れば、今までのも生きてくるかなとも思いました。

【委員長】 そうすると、あえてもう繰り返しませんけれども、今、副委員長がご提案くださったような形で、少し過去にさかのぼって自己点検評価の結果をもう一遍読んでみるということをやってみることはご異議ないですね。

(「はい」の声あり)

【委員長】 時期的には2月、3月ぐらい。運営委員が変わるとまた厄介なので、その前にやったほうがいいよね、きっと。4月前。3月中には。どうなんですかね。

【副委員長】 もしできれば、一番大変は大変なんだけれども、やりやすいのは、今ちょうど22年度の自己点検評価表をつくっているわけですね。それはそれでやっていただいて、あわせてその、それぞれの協議会にもあるんだろうとは思いますが、必要であれば事務局から用意して、それぞれの協議会が過去5年間どういう評価表を出してきたのかをちゃんととじて渡して、つまりそれが一体、そこでどういうことを自分たちが5年間やってきたのかということ、これは自由記述欄でも何でもいいから振り返ってもらおうという。つまり、できていることとできていないことをきちんと明らかにしてもらおう、それはできるような気がするんです。新しい項目をやるんじやな

くて、自分たちで分析、読み解いていくわけですから、議論していただいてもいいし。

もう一つ、E委員がおっしゃったことと関係するのかもしれないけれども、過去5年間は事実としてあるわけで。できなかった、そのときに、せっかくだから5年後どうしたいのか。それも、もしかすると一緒にあわせて議論していただいて、要するに過去5年間を振り返って現在どうなっていて、できたこととできなかったことがある。では次の5年どうするのか。つまり1年1年ではなくて、5年後のことを、目標を具体的にできるだけ書いていただく。これもこういうA、B、Cとか1～5の評価表とは別に、むしろそれぞれのコミュニティに独自性があるはずなので、それは文章になってもいいので、やっていただく。この2つは最低限今の時期にお願いしておいていいのかなという気はするんです。あと、それをまた上がってきたものをどう読み解くかというときに、江上先生のおっしゃった、我々としての独自の評価の仕方みたいなものを考えればいいわけで、初めからどうもこういう項目を立てて、これについて答えてくださいといっても、何かうまく出てこないような気がするので、ワンステップ、まさにそれぞれのコミュニティ協議会で考えていただいて、課題だけはっきりして、考えてもらってそれを集計して我々が考えるというふうにしたほうがどうかなというのが1つあるんです。

あと主管課ヒアリングというのがせっかく入っているので、そのどこかのプロセスの中で、よりリアルな声を主管課で手分けしていただいて、それぞれのコミュニティセンター入ってもらって、具体的には聞き取り調査をしてもらえれば、それぞれのコミセンから上がってきたもののほかに、主管課のヒアリングの結果もあわせて我々は議論することができるので、この2つを並行して年度内に何とかやっていただけないかなという気がするんですけれどもどうでしょうか。スケジュール的にできるかどうか。

【B委員】 例えばこの評価表の最後の目標と成果というので、ここになるとこの1年間とか、書いているね。例えばこの5年間とかね。別の用紙です。この5年間、項目はこういうことだけれども、多分この5年間で、成果と課題を踏まえ、次の年の目標じゃなくて、5年後の何かそういうのかぐらい、今の記述的に書いていただければ。どうでしょうか。負担かからない、またあまり言ったら大変だといって。

【副委員長】 ただ、言っておいて何ですけども、要するに担当者だけで書けないんですよ、多分そうなる。どこかで、ある程度時間をとって議論していただかないと多分書けないと思うので、そういう余裕があるかどうかもちよっとご判断いただかなきゃいけないんですよ。

【B委員】 これいつもあれでしょう。何人かで集まってやられるんでし

よう。

【委員長】 いやいや、書きますよ。この委員長、代表が自分1人で書いてしまうところもあるように聞いています。

【E委員】 あと、運営委員全体でこれ読みながらやるところもあれば、配っておいて集めてそれをまとめるところもあれば。

【委員長】 平均点で丸をつけていくんだよ。

【E委員】 いろいろなところがあるので。

【委員長】 やり方はいろいろあるんですよ。なので、私はやり方のひな形を示したほうがいいのではないかと申し上げた。やっぱり議論することは大事だと思うんですよ。今の運営委員だけかもしれないけれども、とにかく過去こうやってきたと。これからどうしていくということは、だれか1人が丸をつけて書くという話じゃないと思うので、その議論するプロセスというのはすごく大事だと思うんです。

【E委員】 その議論がないとねというか、おそらく運営委員というのは少しずつでも年々、同じ場合もありますけれども、新しい人が加わったり、あるいはやめたりとか、変動がある中で、しかも役員になられたり、代表になる人はかわるところもあればかわらないところもある。そういう意味では、ずっとその5年間なら、例えば5年間見据えても、果たしてどういうふうだったかということになると、今言ったようなことを議論でもしていない限り、みんなの中に残らない、残らないということと変ですけども、役員だけではやめてしまう場合もあったりとかもあるので。これはちょっと違う、しっかりと。

【C委員】 ずっとわりと同じ人が、顔ぶれが変わらなくてずっとやっているところもあれば、5年前のことを聞かれても困るよというようなところもありそうですよね。

でも、やっぱりこうやって記述式にするということは、一応考えて記述しないといけないわけだから、やっぱりこういう何か、こちらで質問事項とかを決めて丸をしてもらいよりも、自由に記述していただいたほうがいろいろなことが見えてくるような気がするんですけども。

【委員長】 スケジュール的にはどうですか。

【E委員】 一応今までのものは1月6日までにやることになっています。この今のスタイルは。だからそれを、例えば新しいものをそれにつけ加えるとなると、非常にちょっと今、それこそ途中の段階のところが多いです。今配られた。

【A委員】 だから、この1年間って先ほどおっしゃった1年間を5年間というのは、ちょっと無理かなと。この中ではきっと無理かなというふうに

は思います。

【委員長】 それは1月6日までではなくて。

【B委員】 ですからまず、やっぱりこの1年の振り返りは必要だと思います。

【委員長】 それはそれでやっていただいて。

【C委員】 ちょっと紙を変えて、5年間のこともちょっと振り返っていただいてというのを別紙で。

【E委員】 追加で。それにはデータというのは市のほうからいただける。5年間のを。

【A委員】 これが出てからですね。

【委員長】 うん、だと思います。

【副委員長】 でも既に4年分あるので、4年分はすぐお渡しできる。5年目の分をつくって議論していただくときに、あわせて今年は今にして、過去5年間こういうことを書いてきたけれども、それを総括するとどういうことが言えるのかと。何をやるべきなのかということをし議論していただいて、それを自由記述で書いてもらうというのでいいかなとは思いますが。5年目の評価とあわせて。

【委員長】 並行してやる。

【副委員長】 ええ。時間をとって、それはそれとして議論をしていただくのがいいかなと思ったんですけど。それだったらわりと負担も少ないんじゃないかと。

【B委員】 一度に。ちょっと時間はかけても一度で終わると。

【副委員長】 ただ、先ほど私が申し上げたのは、せっきく5年間の振り返ってもらうんだから、前向きに議論するために5年後どうしたらいいかもあわせて議論したほうが、もっと皆さんのモチベーションが上がっていいかなという気はするんです。

【E委員】 そうですね。過去を振り返るとというのは、ある意味ではまた考えるのに必要なんですけども、おっしゃったように、ちょっと前に行かないと何か、ちょっとやっぱり違います。気持ち的には。

【D委員】 何となく区切りとして、指定管理期間が5年間あって、17から21年度までだったと思うので、何か今後のことを考えると、その指定期間とあわせて21年度までで、今年はおいとして、その5年分で今後また指定期間で新しく請け負うときに、今後5年間の目標を、それを期首に定めていくみたいなスパンにしていくと、うまく評価が。切れがよく生かせるのかなというふうに思います。

【副委員長】 それはそういう形で、もしできるのであればやっていただ

いて、それと並行して、多分項目立てが必要なのは、主管課のヒアリングに入るときにここに出された評価の視点と判断基準だと非常に機械的過ぎるので、もう少し生のといいますか、ほんとうにそれぞれのコミセンが抱えている課題に即した聞き取りができるかどうかということがポイントになるので、そのところでむしろ柱立てを工夫したほうがいいのかなどという気はするんです。

全体で共通することで1つ申し上げると、例えば先ほどから話題になっているように、今回も資料出ていますけれども、コミセンの利用実績で、まだ利用されていない市民がいっぱいいるという話をしてしまってほんとうにいいのかどうか。今でも、大体予想としては3分の1程度の市民がコミセンを使っておられると。これ、3倍使えという話なのかというふうに考えると、実はそうはならないはずなんです。つまり、すべての市民が使いたいときに使えるようにオープンにはしておかなきゃいけないけれども、実際問題3倍の市民が来たら、もう活動どころではなくなるわけで、そもそもこのコミセンのキャパシティやいろいろな性格からいうと、すべての市民が来るというふうに考えてはいけない施設なのではないか。そうだとすると、利用実績や、いわゆる数値化できる部分で評価する限界というのは非常にはっきりしていて、むしろほんとうに地域の中で必要な施設になっていて、地域の中のいろいろな人たちが必要なときにちゃんと利用できるかどうか。地域の課題を解決できる力をつけているかどうかを何か評価する、やっぱり工夫が必要な気がするんです。

だからそうすると、今のこの自己点検評価表の項目では多分とらえ切れないうらやま、かといって、5年後も含めてそれぞれのコミセンで議論していただくときに、何か目標になるようなものを挙げろと言われたときにちょっと困ってしまうのははっきりしているんですけど。ただ、どうも量的なものじゃなくて質的なものが問われているようなので、そこら辺の工夫がやっぱり必要だなという気はするんです。何かいいアイデアがないと、ちょっと評価はしにくいなという気はしますけど。形式的には先ほどから皆さんにお話しいただいているように、今5年目の評価を、単年度の評価をやって、それにあわせて過去5年間も振り返ってもらって、そして5年後のこともある程度議論してもらおうけれども、その中に、例えば利用者を増やそうなんていうのが入ってきた場合どうするかなど今言っているんですけど。多分利用者は、個々のケースの違いはあるにしても、そんなに増やすという目標を立ててもしようがないし、それが逆にコミセンの活動、コミュニティの活動の質を下げる危険性もあるので、むしろ中身の工夫とか、改善をどうするかということのほうが重要。そういう議論ができるかどうか。ちょっとそこが課題のよ

うな気がするんです。

【B委員】 コミセンの、その今の館の利用、結局結構使われているんです。もっと使いたいという意見もあるぐらいだから、月2回を何とか3回にしたい。それは、結局その人たちのコミュニティといってもいいと思いますけれども、趣味の会であれ何であれ、深まることはあるんです。その中で。だけど、そういう特定の人たちじゃなくて、その地域の不特定の人たち、まあ多数であっても少数でもいいんですけれども、不特定の人たちがもっともっとコミセンに出入りして、参加してくれるような活動がどれだけ行われているかなど。例えば貸し館だけだったら別にコミュニティ協議会がやる必要は全くないわけです。NPOに任せたっていいわけです。むしろそれよりも活動というか、私はここで、第一期コミュニティ評価委員会報告書に書かれている分類の中で、やっぱり交流型のコミセンでいかにあるかというのが、やっぱり一番評価されるべきじゃないかなと思います。ちょっと抽象的ではあるんですけど。それに対してどうすればいいかというのは、やっぱり大きなテーマじゃないかなと。

【委員長】 そこがどういうふうに聞くかというあたりが一番難しいところですよ。これは、今お話出ているように、単に利用者が増えればいいわけではないし、イベントの参加者が増えればいいという話では全然なくて、何かこう、来る来ないにかかわらず、潜在的支持者みたいなものの輪がどれだけ広がっているかということだと思うんです。コミセンの周囲に。そういう目標は、どう書けばいいんだろう。これを聞かれましたら困ってしまうね。

【C委員】 何かそのイベントの担い手になるような人を増やしたいというのは、どこでも思っているみたいでしたね。前の評価委員会のときに。

【委員長】 要するにそのリーダーになり手がいないという。

【C委員】 だから結局そういう人たちのなり手を増やすためには、利用者を増やしたほうがいいのかというふうになるのかもしれないけれども、そうではなくて、もっとそこをよりどころにしているような人をほんとうは増やしたいわけです。部屋を借りに来るだけじゃなくて。そのためにどうしたらいいかというのをちょっと考えたいです。

【B委員】 コミセンを見た場合に、やっぱり運営委員とか評価委員の人数はかなりファクターだと思います。要するに活性化という意味で。だからそこがほとんど変わらない、あるいは減っていくようなコミュニティ協議会は、もっともっと何か根に深い何かがあるのではないかなと。増えていかない理由。例えば「開かれたコミセンになっていますか」とか「十分です」というのは、大体「十分です」になっています。だけど、それであればもっと増えてもいいはずだけれども、増えないというのは、何かほかに理由がある

かもしれないということですけど。

私もやっていて、ボランティアでやっているんだから楽しくないといけない。やりがいがないといけない。やっている人たちに。ほんとうにそういうコミュニティ協議会になっているのかどうか。そういうのがほんとう、数値化ではなくて、何かそういうものがむしろ問われるべきじゃないかなと思う。

【E委員】 まさにB委員が言われたことで、楽しくなければいけないというのはもう究極というか。コミセンというのは部屋貸しだけではなくて、その地域の人がそこに、協議会に加わって、地域のことを楽しく自分自身ができる、しかも地域がみんなの力によってよくなるというのが、それで地域がよくなれば、住んでいる人たちもというか、自分たちも含めて、非常に気分がいいというか、気持ちよく暮らせるというのがあると思うので、副委員長がおっしゃいましたけれども、数ではなくて、利用者が幾ら、利用者が多いということはいいことですが、まずは知られなくてはいけないということが1つはあると思います。知らない人がいることに対して、知ってもらうことは必要。だけど、知った人がまた知ったことによってコミセンを使うかどうかは別だと思っています。

それはその人によって、コミュニティみたいな地域活動に行く方と、そうでない福祉的なボランティアに行く方と、それからほんとうに趣味、スポーツを通じてコミュニティを持つ人たち、いろいろなパターンがあって、それを選ぶのは自分自身というか、全く自由であって、そうでなければおっしゃったように、全部がコミュニティに来られたら、逆に收拾ができないです。だからバランスがとれるのかなと思っています。やっぱり地域活動に力を入れて元気になる方、スポーツ活動に入れて元気になる方とか、それで楽しむ方。この間「お父さんお帰りなさいパーティー」で、栗田先生の話の中にあっただけな。何かとにかく、若い人はもちろんそうですけれども、だんだん年とるにつれて、そういう元気に自分が活躍する場がないと、やはり心から病気になってしまう。だから心が元気だと、まあそういうことは病気にならない人も増えて、今ものすごく介護がどうだとか、いろいろなことが言われて、実際にはそういうものも必要ですが、その介護が必要になる前の段階の住民というか、市民の人が元気で過ごす、少しでも病気にならず一歩手前のことの1つが、コミュニティ活動なのかなと思っています。だからそういう意味で、コミセンは知ってもらわなくては困るというのはやっぱりあります。ただ、全員来なくてはいけないとか、数ではない。ただ、いつでも何か、自分がそういうものに参加したいときに参加できるというのがもっと知られる方法がないとか、そういうことを考えているんですけどもなかなか。今、次はどうしたらいいかというのがありますけれども。

【委員長】 1つコミセンの特徴というのは、やっぱりその地域というのを基盤にしているというところですよ。そのことと、参加するということの前に、それは大事だけれども、行ってみるという段階みたいなのがあると思うんです。そこが結構大事だと思うわけ。第六期コミュニティ市民委員会の報告になぞらえていえば、何げなく行ってみて、そこで何げなくお話ができる、そういう場所というね。もちろんそれは広い意味での参加だと思うけれども、行事とか、イベントとか、グループとか、それに参加するという前の段階、それが武蔵野市の場合なら歩いて10分ぐらいのところにどこでもあるわけで、そういうコミセンの地域に根ざした、コミセンだからできること、コミセンにしかできないことというのをどう育てていくかというあたりがすごく大事なのかなと思うんですけど。

【E委員】 では、そういうことがほんとうは質問の中というか、何か盛り込められたら。

【委員長】 そういうコミセンのあり方というのが1つの考え方としてあると。それについてコミセンではどう考えるかということが聞けたりするといいのかなと思うんですけど。

【副委員長】 そういう意味でいうと、私も委員長がおっしゃるように、コミセンというのはコミュニティなので、地域というのが大事だ、基盤にしているというのははっきりしているわけで、つまり開かれているといっても、市場のように、カルチャーセンターのような開かれ方ではないわけです。やりたい人集まれといっって、やりたくなったらおいでとか、そういう話ではなくて、地域に暮らす人々の基本的なつながりをこれでどうも維持しているというか、再構成しなくてはいけないような、そういう機能を持っていて、だからうまく整理はできないんですけれども、2つぐらいやっぱりコミセンに期待されている機能はあるような気がするんです。その地域との関係でいうと。

1つは、ネットワーク度というか、つながり度。つまり、コミセンの部屋を使ったり、コミセンの講座に来てなくても、コミセンの外に地域があるわけで、コミュニティがあるわけで、コミセンを基点にして地域のいろいろな団体やグループや個人とどれだけつながっているかという、やっぱりそのつながりぐあいが大事で、いいコミュニティというのは多分、実際にはあり得ないけれども、1人もつながっていない人がいないと。だからみんなが何らかの形で、いろいろなつながり方があっていいけれども、つながり方、何らかの形で地域の人と何らかのつながりを持っている。孤立した人を1人もつくり出さないということです。その中にコミュニティセンターが大事なかぎの役割をしている。だからこれは別にコミセンに来てもらわなくても、い

ざというときにつながっていればいいわけだから、やっぱりそのつながり度を何とか意識して目標化できないかということです。難しいことははっきりしている。

もう一つは、今ひとくくりでその20のコミュニティセンターを議論しているけれども、やっぱり改めて拝見しているとすごく地域性があって、やっぱり1年1年でなくて5年単位ぐらいで物事を考えたときに、その地域固有の最優先課題があるような気がするんです。一般的な話になりますけれども、例えばこの地域は非常に高齢化が進んでいて、独居高齢者も多い、独居者も多いということになれば、当然その人たちとどうつながっていくのか、どういうふうにフォローしていくのか、最優先課題になってきます。あと子育て中の若い人たちが多いところ、あるいはマンションみたいに賃貸が多いところになると、それはそれで別の孤立性があるわけで、その地域の特徴や課題をきちんとコミセンの中で議論して、そしてそれを目標に掲げて、ほかはそこそこでもここはちゃんと5年たったら達成できるというか、枠組みがきちんとできていると、そういう地域性とか、地域の課題、固有の課題を意識した目標設定や評価というのができないかなという気がして。どうも利用者みたいな機械的な数でない評価をするためには、質的な評価が必要で、そのときに1つのかぎが、今言ったようにネットワーク度や、あるいは地域の課題、非常に優先度の高い課題について一解決する方向でちゃんと動いているかどうか。やっぱりこの視点は何らかの形で入れたいなという気がするんです。

多分コミセンで議論していただくときも、そういう視点から議論していただくと、もう少し具体的に見えてくるような気はするんですけど。

【B委員】 今おっしゃった、1番目は結構難しいかなと思うんだけど、2番目の件はその地域の課題を、優先課題というのを、例えば少なければ3つとか、あまりたくさん挙げても大変だろうから、3つぐらい挙げてもらって、それに対してというのでもいいかもしれないです。5年後の。あれもこれもできるわけじゃないから。それが3つがいいのか、5つがいいのか、ちょっとわかりませんが。

【副委員長】 私だけ話していて、具体的な1番目のネットワークとかつながりという点でいうと、今話題になっているのは、例えばコミセンを知らない市民が地域の中にたくさんいる。これにかかわって、具体的にあった例ですけれども、これはコミセンじゃなくて、ある町の公民館の分館ですが、そこの職員が分館だよりをつくって、毎月じゃなかったと思うけれども、それを地域で配って歩いていたんです。つまりそれはどういう意味があるかという、普通分館だよりとか何とかというのはポンと置いておいたり、関係

者に配布するので終わっているけれども、実は職員ではあったが、地域を回って1軒1軒配っていくことによって、渡すという目的を持ちながらも、実際には地域の人たちがどういうところでどういうふうに住んでいるかという声かけをやっていたんです。非常に効率が悪くけれども、実は公民館みたいな枠組みですらと言ったらいと思うけれども、それでもそういうふうなやり方をするによって、地域の人々の状況というのがかなりわかって、だからそういうことをやれという意味ではないけれども、例えばそういう方法でも地域とのつながりを深めていく可能性というのはあるのではないかと。ましてや、私もけやきしか知らないのですが、けやきはいろいろな団体と共同でいろいろな行事をやっています。どうも見ていて、けやきのコミュニティセンターの中で利用されている人よりも、よりたくさんの方が外側でつながっているような気がしていて、そういうものを何とか意識的に組み立てていけないだろうか。

そういうことができるようになると、地域の中で孤立化する人というのは非常に少なくなって、文字どおりコミュニティセンターが目指すよりよりコミュニティの実現というのにつなげるのではないかと。どうもそういう踏み出し方を意識的にやる方法はないのかなという感じです。これはアイデアをいろいろと出していかないといけないので、当面はそれぞれのコミセンで考えていただいて、とにかくいっぱい来ればいいというのではないと、つまり、もっと来られなくてもコミセンの外側の地域の人たちとどうやってつながっていけばいいのかということについて、アイデアを出してもらって工夫してもらおうという、そういうことでもいいような気がするんです。アイデアはいろいろとあり得ると思うんです。

【C委員】 緑町に住んでいるので、緑町のことは何となくわからないんですけど、緑町のコミセンだよりというのは、毎月ですか。

【B委員】 毎月。緑町の場合は。

【C委員】 毎月来ているんですけど、ほかのところもそうですか。コミセンだよりを出しているんですか。

【B委員】 毎月ではないところも。

【A委員】 毎月ではないです。年に4回とか。

【C委員】 各戸に配付しています。

【A委員】 そうです。おっしゃったように、フェース・トゥー・フェースで手から手ではなくても、全部のコミセンが大体手配りで全部個別配付はしています。

【C委員】 緑町のことに言っていると、そのコミセンだよりはすごく地味です。何かこう、見ていて全然楽しくないんです。だからやっぱり、そう

いうところで、結局それが利用しない人とコミセンの間の唯一のツールであるならば、もうちょっと紙面を改定してみるとか、多分そういうのを時々やったほうがいいのではないかなと思うんです。紙面を改定したからといって、みんながそれに楽しそうだなと思って行くとは限らないんですけれども、定期的にちょこっと変えて、メッセージ的なものを入れたりとかすると、大分違うのではないかなと思うんですけど。

【A委員】 それ緑町コミセンに言ってあげると大変喜ばれる。

【C委員】 おもしろくないと言うんですか。

【A委員】 それで、その新聞と一緒に協力してつくるとなると、大変喜ばれると思います。「ちょっとこうしたらどうですか」なんて言ってもらえると、逆にうれしいかもしれない。

【C委員】 何年も前から変わらないんですよ、全然。

【委員長】 そういうふうに言えるかどうかというのは、そのネットワーク度にかかわってくる問題なんですよ、多分。

【C委員】 そうですね。何か言って、「じゃああなたやってよ」なんて言われたら、「えーっ」てなってしまうかもしれない。

【A委員】 でも、少しだけ力を貸してあげると喜ばれるから。

【委員長】 そういう意見が、コミセンのドアをたたいて改めて言いに行かなくても、何かじわじわっと伝わっていくみたいだね。そういうことができるかできないかというのが多分その地域の、委員長の言葉をかりればネットワーク度みたいなこととかかわってくる問題だと思うんです。それは何か、一人一人の困ったこととか悩みとか、あるいはうれしいこととか、そういうのもじわじわっと伝わっていくみたいだね。そういう地域になれるかどうかという。

【副委員長】 既に手配りでそういうふうにはコミセンだよりを配っておられるとすると、それをもう一步進めればいいような気がするんです。つまり、実際に地図はつくる必要はないんだけど、建物が建てかわっている場合もあるだろうし、公園がなくなっている場合もあるだろうし、いろいろな問題もあるかもしれない。それをもう一步進めて、そこにどういう人が住んでいるのか、そういう情報もちやんとこう、コミセンの地域ごとにマップ化できるような、そういう動きにつなげていけばいいわけで。どうしても配ると、配ることが目標ですから、手際よくやろうとするわけで、手際を少し落とすだけでも、やっぱりほんとうに地域のつながりや地域の課題を見つけるために、地域の変化を見るためにやるということではないですか。配った後、配った人たちが集まって、それぞれの情報を持ち寄って、ここはこうだったというようなことを振り返りがほんとうはできればいいんでしょう。そうすると、

多分地域の中の課題や地域に住んでいる人たちの状況が大分わかるはずなんです。

例え話をものすごく短く言うと、私社会教育職員と保健師さんたちの学習会をずっと5年ほどやっていたことがあって、そのときに「鳥の目と虫の目」というふうに彼らは言っていたんですね。社会教育の職員というのは、これは自治体職員、行政の職員もそうですけれども、普通の職種というのは地域や集団をそのまま見てしまうわけですよ。ネットワークとして見ていく。そういうのは得意なんですけれども、例えばあそこにこんな困った人がいるといったときに、なかなか手が出せないんです。それはどういう人が得意かという、保健師さんや、民生委員や、児童委員や、そういう人たちがやらなければいけないので。彼らは、とにかく具体的に困っている人、一人一人を救うために動くわけですから、権限も専門性もありますけれども、その2つをどこが組み合わせるんだという話になったときに、多分それはコミニティレベルで組み合わせていくしかないでしょうと。つまり、いくら専門職を配置しても切りがないですから。結局最後はどこにどういう人が住んでいるかというのを地域の人たちが知っていて、必要であれば専門家とつなげて、そうでなければ自分たちで支え合うような関係がつかれるかどうかを議論してもらうしかなくて、そういう状況がほんとうに地域ごとにコミセンでわかっているかどうかですよ。そのためにも、さっき私ネットワーク度という言い方しかできななかったんですが、コミセンの外側にあるコミニティについてどれだけ知っていて、つながっているのかということは何らかの形で評価していただきたいなという気がするんです。

あまりコミセンのレベルでの評価のハードルを高くすると大変なので、5年間のフリートークの評価だとか、5年目の目標を出したり、あと主管課のヒアリングをするときにそういう視点を持って聞いていただければいいのではないかなと思いますけど。

【D委員】 私をやっていた別の、コミセンではなくて女性のセンターですけれども、やっぱり運営している人たちの意識によって、自分たちだけで活用するのではなくて、地元とつながろうという意識を持った人がやると、いろいろなお祭りのときにいつの間にか商店街の方々が入っていたりだとか、境のほうなので亜細亜大学の学生だとかも広く東京外国語大学まで来たりだとか、すごく活性化していることがあって、それはここでいう、いろいろな小中学校だとか、高校だとか、ネットワークの項目が出ていますけれども、こういったことをちょっと意識するだけでも随分違った活動の質になっていくんだなと。それに人が変わるとまた違ってしまって、また自分たちの専門的な団体が集まるようなところにもなりかねない。その意識の持ち方で随分

それが、活動の広がりや質も変わってくるなという気がするのですが、これが1つの指標になるかどうかかわからないんですが、こういう項目でいかにつながっていくか心がけているかということを知りたいというのが必要な試みなのかというふうに思います。

【B委員】 やっぱりキーワードは。たまたま今日12月1日号市報が入っていて、邑上市長が人と人、人と地域をつなぐコミュニティづくりと。やっぱりつなぐということだろうと思うよね。けやきの今年度の目標がつなぐだった。

【E委員】 そうですね。つなぐというか、つながろう。人と人とのつながりを大切にしようということを目指して、ちょっと今年度はなっています。

【B委員】 変な話だけれども、そういうのを、例えばみんな、運営委員とか協議員でコンセンサスを持ってやろうという目標ね。そういうのがないところもあるんじゃないの。ほとんどの協議会をつくっていますかね。

【事務局】 大体どこも、何か年間スローガンのようなものをお持ちです。

【委員長】 時間もたってきているんですが、内部評価については、繰り返しませんけれども、一応経年的な変化というのを1つの材料にして、少し先のことまで考えてもらうということによろしいですね。

外部評価の話が今日まだあまり出てないんだけど、そこは置いておいて、そのヒアリングでどういうことを聞いてもらいたいかというあたりの話に、今なっていたわけです。かなり難しいとは思いますが、でも工夫をして、つながりの広がりみたいなものがどういうふうになっているか、あるいはどうしていきたいかというあたりを。多分これはヒアリングでしか聞けないと思うので、うまく工夫をして聞いてほしい。一緒に考えましょう。

そのほかにここの視点・判断基準というところに箇条書きで挙がっているのは、多分これを正面切って聞いても、データとしては必要かもしれないけれども、あまり質的な部分を聞けないと思うんです。その質的なところをどういうふうにくみ上げるか、そのためにどういう質問をすればよいかというあたりを、ちょっとアイデアを出していただけないか。

例えば、一番最初の丸印の1～5番目、利用者への配慮と適切な対応という項目があって、これは窓口のことだというふうにさっき説明のときにあったんだけど、利用者への配慮と適切な対応を窓口でしていますかと聞いても、あまり多分。自己点検評価表で丸をつけるみたいな感じになってしまうんです。ある種のコーディネート機能みたいなものをきちんと果たしているのかというようなことを聞くとき、質的に聞きたいときに、一体どう聞けばいいんでしょうか。それは窓口がつなぎ役になっていますかというような、もう少し具体的なレベルに落とすほうがいいのか、違った角度から攻めるほ

うがいいのか、多分いろいろな聞き方があると思うんです。

【E委員】 対応していますかではなく、工夫とかやり方はどのように。対応というより、何か考えていますかとか。そのことについて。

【C委員】 やっぱり笑顔は基本です。この前、コミセンに届けるものがあった、コミセン回りをしたんですけれども、やっぱり笑顔のないところ、ちょっと何か、持ってきてはいけなかったかしらと思ったので。

【E委員】 そうなんです。一番は笑顔というのはどこのコミセンも、窓口研修をやると大体笑顔が一番というのは。コミセン同士が集まって何かの議論をしても、そこにはいくんです、いつも、笑顔でと。それが一番に出るんだけれども。

【A委員】 わかるような気がします。

【副委員長】 今のは主管課が聞くということですか。

【委員長】 そうです。

【副委員長】 でも主管課が笑顔で聞くのも。いや、というのは今のは半分冗談なんです。要するにできるだけ、コミュニティ協議会の人たちにも負担をかけない聞き取りの仕方をするために一番効率がいいのは、うまく日程調整できるかどうかわからないけれども、内部評価、過去5年間の内部評価について皆さん議論されるときに伺って、そこで話を一緒に聞いて、聞き取れないところを質問する。だから、そこでやりとりになるのかもしれないけれども、それをコミセンはコミセンで内部評価として出してもらって、それを補足するような意味で主管課がまたメモをつくって出していただく。それでいいような気がするんです。うまく日程調整ができなかったら、それをまとめてもらったものを見ながら、その主管課は別途日時を設定してお話を聞きに行く。

とにかく、おそらく機械的に聞けないはずなんです。ヒアリングというのは機械的に聞いてもあまり意味がないから、むしろ一つ一つのコミセンの課題や可能性に注目して、どういう支援をすべきかということをやっぱり引き出してくるのが、整理するのが主管課のヒアリングの、ある意味では目標なので、そういう意味では、せっかく皆さん議論されているんだったらその場に行って、聞けるものは聞いてくるという形でいいような気がするんです。

あと、構成や判断基準の前に、僕は評価の目的の中に、この書き方だけだとどうしても、私の言い方からすると、市民へのアカウントビリティです。要するに税金を使ってやっているんだからちゃんと説明しなきゃいけない。だれに対しても。そういう意味はこれで出てくるんだけれども、一方でこの評価は、実は行政としてコミュニティ協議会やコミセンをどう支援していくのか。その支援の仕方や、つまり施策です。仕方や方向性みたいなことを探

るんだというのはこの目的のところないと、行政が一方的に何かコミセンを評価するみたいになってしまっていて、これは行政がやるべきことを確認するために評価をするんだと。その視点はぜひこの目的の中に一言、書き方はお任せしますけれども、入れておいたほうがいいと思います。そうすると、主管課がヒアリングに行ったときも立場がはっきりするじゃないですか。つまり、監督者としてヒアリングするのではなくて、何かお手伝いすることありませんかというようなね。そういう視点でいくと、来られたほうも非常に率直な話ができるだろうし、中身のあるヒアリングができるんだと思うんです。ぜひそういう視点で入ってもらえばいいと思います。

【事務局】 おっしゃっていることもよく理解ができるんですけども、ただそうはいっても、何か柱のようなもの、ここのところは必ず聞いておかないとみたいな、議論していただく上での柱のようなものというものが必要なのかなというふうに思います。先ほどの、委員長がおっしゃっていた、5番目の話、利用者への配慮と適切な対応ですけれども、C委員がおっしゃったとおりで、入ったときにやっぱりいい顔をされないと、それ以降二度と行かなくなってしまうようなことってあるだろうと思うんです。それを初めてコミセンに来られた方に対してはどういうふうに対応するように心がけていますか、みたいなことを聞けば、そのコミセンの開かれ度みたいなものはある程度聞けるのかなという気はしています。

【委員長】 コミセンないしはコミュニティ協議会の基本的な役割に照らして、ここは重要だというポイントを絞っておくことでしょう。それを話の入り口にしていくことかな。だから、とても難しいと思うんだけど一緒に考えましょう。そのネットワークの広がりみたいなものをどう考えているかということとか、それから窓口を中心にコミセンというのはある種のコーディネータ的な役割を果たすんだということが、もしそうであるとするなら、窓口を材料にそういうコーディネーター機能みたいなものをどう考えているかということを知るとか、あるいはコミセンに来た人をどうつなぐという努力をしているか、工夫をしているかとか、何かそんなあたりが入り口になるんじゃないですか。

あと、形式的でかつどこのコミセンに聞いても同じ答えが返ってくるようなものはあまり聞いておかなくていいと思うし、後で電話で聞けばいいようなことは。

【副委員長】 ぜひやっていただきたいことは、それぞれのコミセンで過去5年間のこの自己点検評価表を見て、5年間の到達度を議論していただくわけですから、主管課も最低限目標と成果のこのページ、5年分をそれぞれ行かれるときに見ていただいて、ここはこういうことをずっとやっていて、

これがうまくいって、これがうまくいっていない、何となくわかりますよね。これはもう出されているものだから、これを取っかかりにして話を進めていくというのは1つの方法な気がします。かなりどのコミセンも一生懸命書いているような気がします。この5番目については。

【委員長】 それと大切なことは、これは難しいところです。支援の問題ですけど。どういう支援が必要ですかと聞いても、これはやっぱりだめなわけです。もっと金をくれとかいう話に多分なったりするわけで、そこをコミセンとしてどういう支援を望んでいるのかということをあぶり出すような質問の仕方というのは結構難しいと思うね。それがヒアリング調査のところの難しさです。もちろん正面切って聞くことも大事だとは思いますが。その辺をどうつかんできていただければいいんだろうな。難しいな。僕だったらどうするかな。困っちゃうな。

【事務局】 今のお話だと事務局の能力を超えていると思うんですけども。

【委員長】 その辺は多分お話をしながら、いろいろ芽が見えてくるので、芽というのは伸びる芽がね。それを逃さずに、何か出てきたときにそこをより突っ込むというのは、職人技ですよ。

【副委員長】 そうですね。ヒアリングができるようになったら、一人前のフィールドワーカーですから。日程調整の問題もありますけれども、コミセン側の人たちが嫌がらなければ、まさに総括する話し合いの場にオブザーバーでいいから参加させていただいて、最初は聞き役でいいんです。いろいろと話を伺っていて、やっぱり聞いていると見えてくると思うので、それでその中で、先ほどからここで挙げられた視点などを踏まえて、この点はどうですかとか、ここのところはうまくいくんですかとか。何か役所としてこの部分でお手伝いできることはありませんかとか、あるいはこういうことありますという、そういう普通の会話の中で聞いていくしか方法がないかなという気がするんです。もちろん必ず聞かなきゃいけない項目があれば、それはそれで項目化したほうがいいんだろうけれども、実はさっきから言っているように、大事なことはどうも主管課がヒアリングに行くよりは、行くことよりも、コミセンのそれぞれの協議会でちゃんとこの5年間を振り返ってもらって、5年後どうしたいのかという議論をしてもらおうというところが、どうもやっぱり一番大事なような気がするんです。それをコミセン任せにしないで、主管課もちゃんと一緒に聞いて、共有するという、そのようなつもりで行っていただければいいんじゃないですかね。

【委員長】 だんだん時間が少なくなっているのですが、もう1個大事なことが残されていて、外部評価をどうするか。使えるデータもなくはな

い。無作為でやった調査、そのためにやった調査ではないので、そのものずばりというデータがそこにあるかどうかは別にして、1つある。それからかなりバイアスのかかったデータではあるが、コミセンが独自にやった利用者調査のデータもある。そのほかにどういうふうに外部評価というのをするか。

例えば、コミセンの人たちと、極端な話ですよ。実際にやるという話ではなくて、コミセンの人たち、協議会の人たち、それから利用している、していないにかかわらず、市民に集まってもらい、コミセンをどう見ているかという、その議論をすとか。議論というか、お互いに言いたいことを言い合うみたいなことというのも、1つの外部評価にはなるかもしれないけれども、私個人の思いとしては、どういう人たちがどういうふうにやるかは別にして、コミセンの人たちが直接市民と会って話をするというチャンスは、やっぱり1回ぐらいつくりたいなと思うんです。そのアンケートみたいなものと、アンケートで把握できるのとは違う、あるいは市長への手紙とか何か、そういうので出てくるのとは違うやりとりができるのではないかという気がするんです。直接会って話をするということで。どれぐらいの規模でだれにいつ集まってもらうかということとはちょっとよくわかりませんが、何か1回はそういうチャンスができないかなと思うんです。それは外部評価という意味もあるし、それからコミセンというのはどういうところかということ、ごく一部の市民かもしれないけれども、市民に知らせるという意味もあるし。いろいろお互いに誤解しているところというのは結構あるような気がして。それを解くのはやっぱり直接お話をすることが大事かなと思うんです。

【E委員】 これは時期がありますね。この外部評価。いつごろやらなければ。

【委員長】 もちろん。そんな具体的なことは考えていないけれども。

【E委員】 ちょっと今、私には個人的にしか言えないんですけども、これはみんなと話し合わなきゃいけないことですが、協議会の方たちと。例えばの話、コミュニティ研究連絡会がありますけれども、そういう主催というか、そこで皆さんに集まっていただいて、市民の人たちと何かができるものはあって、今のようなことができる可能性もあるのかなと考えたんですけども。そういうことも。

【委員長】 コミュニティ研究連絡会にこちらが相乗りしてしまうという。

【E委員】 コミュニティ研究連絡会がやるというか、そういう協議会全員、市民と、でもなかなか、一遍に大きな会場でやるというのは難しいことです。あまり聞けない、意見も言えない。そうすると個別のほうがやはりいい。

【委員長】 例えば漏れ聞くに、基本構想・長期計画を考えていく中で、

コミセンへのいろいろな期待とか、あるいは不満とか、そういうものは結構出てきているわけです。もちろん、それは構わないし大事なことだけれども、あっちでこう言っている、コミセン側はこう言っているだけでは、やっぱり話は進まないでしょう。それをアンケートとか何か、そういうもので媒介しても、これはあまりうまくいかないんだよね。言いたいことがやっぱり伝わらない。悪くするとより以上に誤解を深めてしまうみたいなところがあって、もちろん全市民が参加するわけではないからごく一部の人たちしか参加しないわけだけれども、それでも小さな成果しか生まないかもしれないが、やっぱりこの機会を使ってそういう、極端に言えばコミセン批判派とコミセン側と、やっぱり直接腹を割って話すという機会があったらいいなと思うんです。

【E委員】　　そういうのは地域別がやはり、その地域。

【委員長】　　コミセンごとにやるのはかなりきついから。

【E委員】　　ですよね。何回もやらなきゃいけなくなっちゃう。

【委員長】　　それこそ無理だと思うので。よくやる3地区、3つのこととか。

【E委員】　　地域が固まっているところですね。

【委員長】　　でもまあ、そういうのにコミセンの方々は来てくれるかもしれないけれども、市民の人は来ないとかね。

【E委員】　　そこです。そこが問題です。どうやって呼びかけたら来るのか。

【委員長】　　そういうこともあるし、具体化するのとはなかなか難しいとは思っただけけれども、どうですか。何かそういう機会というのは1回ぐらいあってもいいかなと思うだけけれども、必要ないかな。

【副委員長】　　具体的な進め方はもう少し工夫が必要であるにしても、まず最初、委員長がおっしゃったように、外部評価について別途アンケートをとったりする必要はもうないと思っているんです。かなりというか、使えるものが結構ありそうなので、既存のもので使えるものは使ってしまうと。だからそれはそれでいいと思う。あと、ではどうやってフォローするかといったときに、もうちょっと前向きな議論になるような仕掛けが必要だろう。そのときに、今お話に出たように、コミュニティ研究連絡会とこの評価委員会が、場合によったら協働でコミセンの未来を考えるシンポジウムかパネルディスカッションか、何かそういうものを作って、もちろん関係のない市民は来ないですよ。だから、意識的にそのときのパネラーとかシンポジストとして、コミセンと接点がないけれども、地域の中でいろいろとやっている人と呼んで、そして言いたいことを言ってもらおうと。コミセンにかかわってね。批判もあるかもしれないし、期待もあるかもしれない。そういう仕掛けをし

た上で、とにかくある程度責任を持った発言をしてくれる人をこちらで組織してしまうというところもあると思うんです。

もちろんシンポジストやパネラーというのは限られているから、いくら多くても限界がありますので、工夫をして、フロアからも自由に意見を言っていただくようなことは考えられるだろうけれども、それはさっきから話題になっているように、特定のコミセンというよりは、この武蔵野市のコミュニティセンターのやり方そのものについて意見を言うてもらおうという格好のほうがいいような気がするんです。仮に特定の地域でやるにしても、それはたまたま1つの事例であって、典型例であって、そこだけの話ではないというような形で、そういうのを多分、2月か3月あたりに1回開ければいいのではないか。だから先に内部評価と主管課ヒアリングとここでの議論を先行させて、ある意味では結論が出そうなときにそういうイベントみたいなものを作って、外部評価にかえるということはあると思うんです。

【A委員】 私、大変そういうふうなものを希望していたので、コミュニティ研究連絡会も一緒になってやっていければいいかなというふうに思います。

【委員長】 なるほど。偉い先生のお話を伺うシンポジウムというのはたまにあるけれども、そういうのではなくて、ほんとうに市民同士がやりとりできるようなものがあるといいよね。

【A委員】 ある意味、30年、20年と経過していて、やっぱり妙な定着の仕方もあると思うんです。だから、もっと新しい人たちに目を向けていただいて、仲間に入っていていただいて、これから動くには、やはり市全体に投げかけていかなければいけないかなというふうには思います。

【委員長】 そうすると、大体その評価の構成、3つ挙がっているものをどう進めていくかという、確定はしませんけれども、大体大まかな方向性は今日出てきたかなというふうに思うんですが、いかがでしょうか。まだこんな議論が足りないというようなことが。

(「はい」の声あり)

【委員長】 ぼちぼち決められた時間が迫りつつあるので、やり残すということはないですかね。大丈夫ですか、副委員長。

【副委員長】 大丈夫だと思います。

【B委員】 ちなみにA委員のところは、毎年自己点検出されるときは、やっぱり何人かの方が集まっていますか。

【A委員】 最初のうちはそういうこともありましたけれども、だんだん回を重ねるごとに、前回などは運営委員会でみんなで1項目ずつ話し合っていて、それでそれぞれ丸は自分でつけて、集めて。

【B委員】 先ほどの話、平均点、何人と。

【A委員】 平均点。といいますのは、私達のほうは地域といいましても本町なので、地域の人々の運営委員よりも外からの人が結構多いものですから、市内全域なので、やっぱりちょっと、この関係団体とのかかわりはわからない人が多いです。それでそういう項目については、それぞれ自分の地域の福祉の会はわかるけれども、本町の福祉はわからないとか、そういうことの差が激しいものですから、なかなか難しいところがあります。

【B委員】 それだと負担かかるね。個人でこれ書いて、それを集めて集計する意味、ちょっと僕は理解しにくいんだけど。やっぱりそれよりも、その運営委員の方たちで集まって、1項目ずつみんなで意見出し合って、全員の大体総意といいますかね、ここだなと。そういうので一つ一つやったほうが、個人負担はもっと軽いんじゃないでしょうかね。

【A委員】 そうですね。ただ、欠席する方もいますので。

【B委員】 もちろんそれはしようがありませんけれども、全員の方に同じものを書いていただいて、集めて集計するのはちょっとね。それこそ確かに負担になりますね。人によっては。得意な方、みずから書きたい人もいるだろうけれども。それはちょっと負担だね。それだったら運営委員会で集まれる人だけ集まって、これだけを議論していただく場を持っていただいたほうが早いのではないのでしょうか。

【A委員】 そうですね、はい。今回また、もうちょっと考えてみます。

【B委員】 まあ最後はどなたかが書くしかないんだけど。そうですか。それは大変だ。

【事務局】 今おおむねそういうお話をお聞きしていて、過去5年間の自己点検評価表を協議会ごとにとじていって、これを見直してくださいと。過去どうだったのかということ振り返っていただいて、そして今後5年間たったときに、自分たちのコミュニティ、あるいは協議会はどういうふうにあるべきなのか、みたいな話をさせていただくような場を設定しましょうというふうなお話だろうと思うんです。そこに私たちが出かけていって、やりとりをしながらということなんですけれども、1つ気になっているのが、B委員もおっしゃいましたけれども、コミュニティ協議会全体の中で、この自己点検評価についても必ずしもウエルカムではなくて、相当負担だというふうな認識をしているところもあるんです。そこに今回やって、今年度分をやってもらっていて、もう1回その場を設定するなりということになって、私たちが出かけていく分には、私たちは構わないんですけれども、協議会のほうとしてそれを受け入れるぐらいの余裕があるのかどうなのか、負担にならないで可能なかどうかということですが、コミュニティ研究連絡会の代表

のお二方がお見えになっているので、それがどうなのかということがまず第1点です。皆さんのほうでそれぐらい大丈夫だよということであれば問題はないのかもしれないんですけども、それとも、何年かに1回の評価委員会だから、ちょっとこのぐらいは頑張ってもらおうというふうな話になるのかということですが。

【E委員】 そうですね。正直に言えば、これから年度末にかけては、ある意味でまた忙しいところも多い。急に、月日がほんとう長ければあれなんですけれども、やはり短い期間内でやりますよね。そういう今言ったどこかで。

【事務局】 委員長のお話からすると、あまり人がかわらない、年度がかわらないときのほうがいいですねということですね。

この間、過去5年間のこともわかりながら今回もやってということであれば、今の人たちの中でということだと思うので、この委員会自体の次回の持ち方ということもかなりそれによっても変わってくるだろうなと思っています。日程調整は1月末から2月初めぐらいまでというふうに考えていますけれども、その期間をかなり、やってもらおうというふうになって、それをやるとなればそれなりの期間をとって、私たちもヒアリングに参りますけれども、それをどういうふうな段取りでやっていこうかなということがあります。

【副委員長】 私も様子がわからないので、全部のコミセンがやれるかどうかかわからないんですけども、先ほどD委員がおっしゃったように、節目であることは確かですよね。指定管理は5年で切れてしまいますから、ちょうど来年度からまた出さなくてはいけない、そのときに何も出さなくても基本的には今までどおりでいくかもしれないけれども、やっぱり5年ごとに評価をして、ちゃんと計画を出していくということをやるという理由づけにはなるので。ちょっと今年は負担だけでも、逆に言えば、今までどおりというだけではなくて、積極的に行政としてもコミュニティ支援のやり方を模索しているというようなことを踏まえて、今年は特別とってお願ひするという手はあるような気がするんです。そういうことであれば、何かまた余計なものをやらされているというふうには済まないと思うので。だからあとはその成果をちゃんと受けとめて、だから評価しっぱなしではなくて、評価を形にしてお返しすればいいんだらうと思いますので、そういうふうに説得していただくしかないですかね。

【A委員】 5年はたったんですか。

【事務局】 5年はもうたっています。この4月から、今年から新規の5年間になっていますので。

【副委員長】 ああ、そうか。ちょうどずれたんだよね。

【委員長】 新規の5年間が始まったところなのでという。だから、ごり押しという言い方はよくないけれども、ちょっとプッシュしていただくような感じでいいんじゃないですかね。それで評価委員会名での何か文書みたいなものが必要であればつくっていただいてもいいかと思うし。

【事務局】 だとすると、この1月、2月の会議をどういうふうに設定するかということになってまいりますね。

【委員長】 それは具体的にヒアリングがどういうふうに進むかというめどが立たないと、次は多分そのヒアリングが終わったぐらいでいいと思うんですよ。そのめどというか、スケジュールが事務局のほうで少し定まってきたあたりで。もう1回日程調整をするような格好でお願いできますか。もちろんその前に、ちょっとやっぱり集まらなければいけないということであれば、それはそれで仕方ないと思うし。

【副委員長】 一応念のため、日程調整表は後で出しますけれども、出しておいて、ただここにやるかどうかはもうちょっと進みぐあいを見て考えたらどうでしょうか。

【事務局】 わかりました。

【委員長】 ということでよろしいですか。

【B委員】 ちょっとけやきの例だと、各個人にみんな配付されるんですか。されようとしていたんですかと聞いてもいいんですけども。

【E委員】 今年は各個に配付して、それで集める。いついつまでに集めて、やり方は去年とかその前って、けやきは毎年変わっているんですけど。工夫というか、今年はこのやり方、毎年ずっと同じというわけじゃなくて、今年はそうして、それを集めたものを代表委員というのが5人いるんですけれども、その中身について、一応集計をした上で話し合いをするという。ただ、その先、いつもそうなんですけれども、そこでは一応役員の考えの中には、おそらくそういうことをやることによってどの程度みんながこう思っているとかいうのは、大体の数字的には、それなりの理解はしたりとか、ご意見も、あるいは個別にご意見いただいたものについては把握をして、ただその次の年度になったときに、それが実際にそのものを見て、例えば生かすとか、そういうことに具体的にはなっていないというのが現状でして、だから、いわゆるこの評価表というのはわかりません。ほかのコミセンではもっと具体的に活用しているのかもしれないんですけども、ただおそらく、これが具体的に生かされているかどうかということにみんなが疑問があって、この評価表をもっと生かせるものになれたらいいというか、そういう考えがあることは確かだと思います。

【B委員】 先ほど、最初のころに委員長おっしゃった、運営委員会によ

る議論をぜひともやってほしいなど。それが今の、例えばけやきだと議論される方は代表5名なんですよ。

【E委員】 そうですね。

【B委員】 どれくらいイメージで、先ほどおっしゃったんですか。そういう運営委員の。

【委員長】 少なくとも運営委員会レベルかね。

【B委員】 レベル。全員じゃなくてもね、もちろん。

【委員長】 あとはほんとうはそのミニシンポジウムみたいなものを、一般市民も入れて、各コミセンでできるぐらいの力がついてくるといいなとは思いますが。

【E委員】 だから前の年、その2年ぐらい前だと、逆にもう運営委員会で1回ずつ話して、「じゃあそう思うという人は手を挙げてください」とか言って、ほんとうにその場で、それも集計しながら議論して、すごい時間かかってしまって。特別運営委員会をそのときは設けたんです。ふだんの運営委員会以外に、運営委員会をやるといったらみんなが「えーっ」とか言われて。「忙しい中もう1回運営委員会やるの」とか言われて、でも必要なことだからといって、そのときはやったんですけれども、それなりにみんなも負担なのか何なのかよくわからなくて。

【B委員】 いや、だからその個人レベルでこれを書いた上で、もう一度集まってどうとかいうと、これは負担かもしれませぬ。いきなり、もうこれですばり、委員会でそれを順番にチェックしていく。過去のやつがあるわけだから、それほどは問題じゃないやつはさっといくんじゃないかと思うんです。だから問題のものは何なのかというのは、ある程度みんながそれを共有しないといけないわけです。そうなるために議論するということで、全部同じ時間をかけてやる必要は全くないと思いますし、それはやり方じゃないかなと思いますけど。私はそういうのをやってもらえればいいかなと、先ほど委員長の話で聞いていたんですけれども。

【E委員】 だから問題点のあるところを議論していくことが必要なんです、要するに。ほんとうに問題ないところは、だってみんなも問題ないと思ってやっているし、おそらくそれが普通に行われているんでしょうから、問題あるところはどうしたらいいのかとか、どうしてそう評価が、自分たちも一番悪い、例えば極端な言い方をすると、悪いところにつけたのかということ自体が問題であって、もしかしたら中に問題があるのかもしれないし。やり方なのか、もうちょっと考えてないのか、市民に投げかけてないのかとか、その辺は確かにおっしゃるとおりだと思います。

3 その他

4 閉会

【委員長】 　では、いろいろ困難も多いかとは思いますが、少し方向性も出てきたということで、特に皆さんなければ今日はこれで閉じたいと思いますが、よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。次回についてはまた追ってご相談させていただきますので、よろしく申し上げます。

【事務局】 　ありがとうございました。

―― 了 ――